

## 惨痛の此岸

別段、何の前触れがあつたわけではない。カーテンを閉め忘れた窓から差し込む朝日がきつかつたなどと言うわけでもなければ、けたたましい鳥の声でしたわけでもない。ただ、穰は、水の底から浮き上がってくるような自然さで、ふと目を覚ました。長い夢を見ていたような気分で見つ黒に淀んだ目をぱちぱちと瞬かせると、彼は消えて日光を反射している天井の蛍光灯を視界に入れ、それから手を横に伸ばし、昨晩隣へ寝かせておいた百合に触れようとした。起きたの？という彼女の声と、握り返してくる手が欲しかったからだ。だが、彼の瘦せた手は虚しく宙を掻いただけだった。怪訝に思つて体を起こせば、百合がいない。穰はきよるきよると部屋の中を見回して百合を探したが、どこにもあの美しい女の姿はなかった。ゴミ捨てにでも出たかな、と思つて壁にかけたカレンダーを見たが、今日はゴミの日ではない。その事実には、穰は驚かざるを得なかった。彼女の行動を穰が把握し切れていない、という状況は滅多にないことだった、なぜなら、勝手なことをすれば彼が怒ることを彼女は知つてはいるはずだからである。

「……百合？」

名前を読んでみるが、返事はない。窓に取りついて、外を眺める。やはり、百合の姿はない。それどころか、人の姿すらないようだった。変だな、と穰は思った。鳥もいなければ、車も通っていない。この辺りは確かに細い道が多いから、車は少ないのだが、バイクや自転車すら姿が見えないのはいかにも奇妙な光景であるように思えた。まるで、俺しかこの世にいないみたいだ、と穰は身震いする。何もかもが死に絶えて、それなのに、穰が一人だけ生き残っている。そんな世界に移り住んでしまったのではないか……。穰は胸のうちへ湧き上がった寂寥に、また「百合」と彼女の名前を呼んだ。しかし彼の悲鳴じみた呼び声も、この朝においては何の意味も持たず、畳へ転がった。それがなぜかおそろしくなつて、穰は「百合！」と叫んで窓を勢いよく開けた。

「百合！ どこに行きやがった、百合!! 帰ってこい、このクソアママ!!」

窓を開け放つてあらん限りの声で叫ぶが、百合は——いや、普段ならそこかしこにいるはずの猫すら、彼の声には反応しなかった。いつもなら、自転車のブレーキにさえ驚いて茂みをがさがさ言わせるというのに。

……いつたいじゃない、なんだつて言うんだ？

穰は恐怖心のせいで苛々しながら、窓を叩きつけるように閉めると、代わりに寝室の襖までずかずか歩いて行き、こちらでも荒々しくびしゃりと開けた。

廊下は、すっかり冷え冷えとして、自分の家ではないようにすら思えた。子供の頃から、ずっとこの家で育っているはずなのに。父も母もいなくなつてはいるが、その他は何も変わらない。そのはずなのに、なぜか穰にとって今のこの家は、他人の持ち物であるように思えた。

穰がそうして呆然と静けさに身を浸していると、不意に、にゃあ、と足元で鳴き声がした。驚いて文字通り飛び上がり、勢いよく床の方へ目をやる。だが、そこにちんまり

と座つたものを視界に入れて、穰は安堵した。

鳴いたのは小さな猫だった。まだ子猫だろうか？ 汚れてはいるがふわふわとした毛並みに、くりくりした黒い瞳と、モノクロの柄をしたその猫は、真つ直ぐに彼を見ていた。

「なんだ、お前、どこから入ってきたんだ？」

裏口開いてたかなあ、などと笑いながら、誰よりも心強い味方を得たような気持ちで、穰はしゃがみ込むと猫に手を差し伸べる。猫は人懐っこい声でまた「にゃあ」と鳴くと、彼の手に頭を擦りつけた。

「はは、可愛いなあ。どっかの飼い猫か、お前」

顎を指で撫でてやると、猫はごろごろと喉を鳴らす。子供の頃も、こうやって猫とよく遊んだものだった——もつとも、どの猫も穰が殺したが。

「なあ、猫、一緒に百合採してくれよ。あいつ、どこにもいないんだ。俺のものなのに、百合がいなくなつたんだ。俺、あいつのこと大好きなんだよ」

わしわしと綺麗な毛並みを撫でまわしても、猫は怒らない。それどころか、いつそう穰に近づいてくる。

それに気が良くなつて、穰は猫を抱き上げて立ち上がるうとした。だが、猫はするりと穰の腕から逃げると、床の上から悲しそうに穰のことを見上げて、にゃあ、とまた鳴いた。そのまま階段の方へ向かつて、たつと走り出した猫に、穰は焦つた。この訳の分からない状況でまた一人にされるのかと思うとおそろしかつた。

だから穰は急いで猫を追いかけ、台所へと飛び込んだ。見れば、台所の窓がわずかに開いている。どうやら、この猫はあそこから入ってきたらしい。猫は、流し台の下で登れずに右往左往している。だが、安堵しながら近づこうとする穰を、猫はシャーッ、と牙をむき出して威嚇した。

先程までとは打って変わった態度で毛を逆立てて威嚇する猫に、穰は怒りを覚える。

さつきまではあんなに懐いてくれたのに、なんだと言うのだ。むかむかして、穰は猫の傍まで歩いて行くと、包丁などを入れている引き出しを勢いよく開けた。足元で威嚇し続ける猫には目もくれず、穰は引き出しの中からアイスピックを取り出す。そして彼はごんつという鈍い音とともに引き出しを閉めてから、猫の傍にしゃがみ込んだ。

「お前さあ、俺のこと嫌い？」

聞いても無駄だとは知っていた。所詮獣だ、意思疎通なんてできるはずがない。穰は一つ溜息を吐くと、威嚇する猫に向かってアイスピックを振り下ろした。

前脚の付け根から血が噴き出して、猫の悲鳴が上がった。猫が逃げようとする。だが穰はさつと尻尾を掴むと、後ろ脚にアイスピックを振り下ろした。「なんでお前ら、そうやって逃げるんだよ。俺は好きなのに」そう言いながら、また振り下ろす。血まみれになった猫が、震えながら床を引つ掻いて逃げようとする。その姿にカツとなった穰は、猫の首へ向かつて勢いよくアイスピックを振り下ろした。

——おそらく、それ以上は苦しまなかつたはずである。

床を血と肉まみれにして気の済んだ穰は、立ち上がってアイスピックを流しに抛り捨てると、どうしようかな、とまた途方に暮れた。とりあえず、この世界に自分一人しか

いない、というわけではないらしい。となれば、外に出てみればいいのだ。これは名案であるように思えた、少なくとも、猫と戯れるよりは幾分マシだ。

穰はいそいそと寝室に戻り、血の付いた寝巻をジーンズと長袖シャツに着替えると、薄手のトレーナーを着てから、台所の残骸はそのままに玄関を出た。コンビニまで行けば誰かしらいるだろう。そんな希望的観測を抱きながら、鍵をかけ、門を出る。歩きながら、車が欲しいな、と穰は少し思った。バイクでもいいけれど。

貯金がそのまま残っていれば車だろうがバイクだろうが買い放題だったのだが、いかんせん、あの夜鷹のクソどもに貯金の大半を奪い取られてしまった。穰は夜鷹の浅黒い肌を思い出しながら舌打ちをする。あのブラジル野郎だけは許さねえ、と彼は思う。俺の金だったんだ、あれは。轢き殺されたことは、百合を手に入れられたことで正直どうでもよくなったが、金だけは許せない。そのせいで俺は――

「――あれ？ なんだっけ？」

穰は何かを思い出そうとして、だが思い出せず、歩きながら首を傾げた。何だったかな。金がなくなつて――だから、薫とか名乗る男から死体を買うようになって――だから――

「……やっべ、思い出せねえ……」

今穰の中にある全ての不安と恐怖の原因は、ここにある気がするの。

しかし、どうしても思い出せない。穰は思い出せないその記憶を掘り起こそうと努めながら、鳶の絡まったコンクリートの塀を右に曲がって、まだ進む。近道を通っているのに、コンビニが遠い。あまり行かないせいもあるだろうが、道を間違えたんじゃないかと思うほどだ。春の初めなのに寒いのも気に障った、本当に、今日はなんだつてんだ。

それでも今更引き返すなどは馬鹿らしく、黙々とコンビニまで歩いて行くと、やがて大通りに出た。もうすぐだ、と穰は歩を早め、コンビニで何か買おうかな、と考える。ティッシュとか必要だったような気がする。でもスーパーが開くまで待った方がいいかな、安いし。髭剃りクリームはあつたっけな？ ……そんなどうでもいいことを考えながら、穰はふと、車が本当に一台も通らないことに気が付いた。朝とは言え、大通りだ。一台や二台は通っていておかしくないはずなのに。

今日は祝日だったかな。いやそれでもおかしいな。穰は眉根を寄せ、歩みを止めた。辺りを見回すが、誰の気配もない。それに、風の音がしない。風が吹いていない――少しも。気付いた途端、焦燥が、彼の肩に重くのしかかってきた。穰は小走りになって適当な家の前まで行くと、チャイムを鳴らす。朝だろうがなんだろうが構うものか。

だが、誰も出て来ない。また穰はチャイムを鳴らした。三度目。四度目。十度目を鳴らしたところで、穰は諦めた。隣の家も、隣の隣の家のチャイムも鳴らしてみたが、どこも結果は同じである。

(まさか、本当に誰もいないってのかよ?)

不発弾でも埋まっついて、近所の住民をみんな避難させたとも言うのか、まさか。

確かに穰はテレビも見ないし新聞も読まない。しかし、それでも、周りがそんなことで騒いでいたら百合が黙ってはいないだろうし、穰だって起きる。いや待て、だが、それならさっきの猫はなんだ？ 猫がいたじゃないか、あれはおそらく飼い猫だった。あれ

こそ、他の人間が存在している証拠じゃないのか？

そうだ、この先に犬を飼ってる家があったはずだ。いつも穰が通りかかるたびに吠えかかる嫌な犬だ。穰はごくりと喉を鳴らし、走り出す。猫がいるのだから、きつと犬もいるはずだ。そうに違いない。いつもよりもずつと遠く感じる道のりを走って、穰はその家に辿り着いた。

だが――

「なんで……なんでいねえんだよ……」

いつも犬が繋がれているはずの小屋は、空だった。首輪と鎖は庭に垂れ、それなのにも関わらず、餌入れには餌が入ったまま残っている。予想通り、チャイムを鳴らしても家人は出て来なかった。何が何だか、さっぱりわからない。これでは、本当に、蒸発して消えたみたいじゃあないか。

業を煮やした穰は門を飛び越え、置いてあった植木鉢を投げつけて窓を叩き割る。がしゃあん、という激しい音が辺りに響き渡る。これなら人が来ないはずがない。穰はへらりと笑って、人が来るのを待った。実際に人が来たらどうしようとか、そんなことはまるで考えていなかった。穰はただ、この不安から脱却したかっただけで、それ以上のことなどどうでもいいのだった。

冷たい腕をさすりながら、敷地の中でじっと待つ。どれくらいの時間が経っただろうか？ 半ば諦めかけた彼の背後で、車のエンジン音が聞こえてきた。それを聞きつけた穰は門を飛び越えると、転がるように車道へ躍り出た。

耳をつんざくブレーキ音に顔をしかめつつ、穰はその赤い車に駆け寄る。

そして、彼は、仰天した。

「よ、だか……!?」

「……なんやあ、穰やないか」

紫煙をくゆらせながらその車を運転していたのは、忘れもしない、あの夜鷹だった。

チャチな安い銃を片手に飛び込んできた穰を格拉グラと嘲弄して殴りつけ、犬のように捕まえて、自分の領域に引き入れて仕事を回し、そして殺した男。

それが、この異様な街で、車を乗り回していた。

「てめえ……」

「まあ、落ち着けや、穰よお。あと、わしを夜鷹で呼ぶんはやめえ。わしにやあちやんと名前があるんや」

「ふざけんな!! 金返せクソが!!」

「この期に及んでそれかいな? ……まあ、もうどないしようもないんや、落ち着け、それしかねえわ」

「何がどうしようも……」

反論しようとした穰を遮って、夜鷹が「ハン」と鼻を鳴らした。

「何もかも、どないしようもないわいや、地獄やけん、こゝ」

「……は?」

穰は顔を歪めて、車に乗ったまま煙草を吸う夜鷹を見た。中年は煙を吐き出し、アスファルトに灰を捨ててから、「そう、地獄や」と繰り返した。

「……はっ、ははは」

穰は声に出して笑った。

「ここが地獄だって？ なら、てめえは神様に会ったつてののか？」

「わしはそもそも神なんか信じとらへんし、神様もそんな人間のとこへ現れるほど暇じゃあないやろ。でもここが地獄なのはマジや……こんなもん、地獄以外の何物でもあらへん」

「どこがだよ——どこも、代わり映えのしない街だろうが！」

穰は両手を広げて周りを示す。どこも、至って何の変哲もないただの住宅街だ——どこにも生物がいらないことを除けば。しかし夜鷹は驚いたような顔をして、「お前……本っ当に、気付いとらへんのか？」と、吸い終わった煙草を道路に捨てた。

「何にだよ！」

「自分が死んだことに、や」

新しい煙草に火を点けながら、夜鷹は白濁した右目を穰に向けた。

「俺が……死んだだど？」

「せや」

「馬鹿言ってんじゃねえ——俺は生きてる!! この通り!!」

穰の叫びに、男の右目が細まった。そう言えば、穰が生きていた頃は、夜鷹の右目はこんな風に潰れていなかったように思う。そうだ、こいつの右目が潰れたのは、穰を轢き殺す直前だ。ナンバーの外されたトラックに轢かれて、内臓と骨をぐしやぐしやにされ、瀕死で道路に横たわる穰を覗き込む夜鷹の右目は、今のよう潰れていた。

「ほんなもん、忘れてるだけやろ。思い出しや——穰、お前、死んどんねん」

忘れてる、という言葉で、穰は自分の中に、どうしても思い出せない部分があることを思い出した。だが、それがまさか死んだ時の記憶だともいえるのか。

「……馬鹿馬鹿しい。てめえの妄想に付き合ってる場合じゃねーんだよ、俺は」

「妄想ちやうがな。事実や。なあ、×××××、×××××、×××××、×××××、×××××、×××××、×××××、×××××、×××××、×××××、×××××、この十人の名前に聞き覚えあるやろ？ 特に×××××——お前を殺した——」

「与太話はやめる!!」

穰は赤い外車の扉をスニーカーで思い切り蹴り飛ばした。十人の名前は聞き取れなかったが、ひどく不愉快なのだけは確かだった——とにかく、夜鷹を黙らせたくて仕方なかった。

「俺は死んでないし、そいつらなんか知らねえ!!」

「……哀れやなあ、地獄に落ちても己の生を信じるなんぞ」

「だから——」

これで黙らなければいつそ殴ってやろうかと——振り返ちにされるのは目に見えていたが、何せ、夜鷹と自分はまだあまりに体格が違い過ぎた——思いながら、穰は口を開き、不意に視界の端で何かが動くのを捉えた。穰はそれに、「それ見たことか」と、口角を吊り上げて車内の夜鷹を見た。

「ほら見ろ、何が地獄だ！ 俺は百合を探す、探して連れ戻す」

「いや、百合っちゅうその女は——」  
穰は最早男の話など聞かなかつた。視界の端で動いた何かを追いかけて、走り出す。夜鷹は、追いかけてこなかつた。



走り去つた穰の背中を見ながら、夜鷹は煙草を捨てた。こうなつては仕方がない、あの男はどうしようもなく囚われ続けるだろう——この地獄に。どうしようもないのだ、そう、どうしようもないことなのだ。自分の見ている景色と、穰の見ている景色はきつと違う。彼にとつてこの街は、慣れ親しんだ近所の家々であつて、夜鷹が見ているように閉じた廢墟群ではないのだろう。

何もかも崩れ落ちて絶え果てた、この、渴いて終わってしまった世界ではないのだ。そして、だからこそ——希望を求めている。

きつと彼は永遠に求め続けるのだろうか、と夜鷹は思った。そんなもの、どこにもありはしないのに。その一点において、この世界は現実 に似ていた。

そんな世界で希望を探し続けること、それはきつと、地獄の苦しみなのだろうと夜鷹は思った。希望など一切存在しない中で、希望を探し続ける苦痛とは、徒勞とは。男は、自分の考えを鼻で笑う。最早どうだっていいことだった。夜鷹は自分が殺された時のことを覚えていゝるし、第一、この世界で彼が真つ先に見つけたものと言へば、自分の死体だった。だから夜鷹は、自分が生きていゝるなどとは到底考えられないし、希望を探そうとも思えない。それに、希望なら、先程既に捨ててしまつた。

あの、差し伸べられた、優しい手を。

夜鷹はまた、自嘲気味に鼻を鳴らした。おそらく穰もまた、自分と同じくこの世界の中で何かを捨てたのに違ひない。夜鷹は確信めいた気持ちでそう思った。恐れたのか、怒つたのか、それらの違いはあるにせよ——与えられた希望を自ら捨てたのだろうか。

——きつと、あいつとはもう会うこともあるまい。

夜鷹は、踵を返すと黙つてまた新しい煙草に火を点けた。そしてまた、この無意味な世界を歩き始めた。

そう言へば、あいつには車なんてのが見えていたようだ、などと思ひながら。